

フランス現代演劇における「自己-他者」関係の分析	
津田 久美子	比較社会文化学専攻
期間	2007年12月16日～2007年12月30日
場所	フランス パリ
施設	フランス国立図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館

本調査研究は日本国内においては入手困難であるエレーヌ・シクスーの戯曲に関する劇評や論文の収集、および目下構想中であるジャン・ジュネの『女中たち』論執筆のための資料閲覧、および収集を目的として行われた。特に今回は後者の資料調査を優先的に行ったため、本報告では『女中たち』論を構成するにあたってのこれまでの分析と、本調査研究によって得られた成果、今後の論文の方向性について、その調査の実際も含めながら述べることとする。

なお、本調査研究および今後の研究成果は、文学作品における「自己-他者」関係の分析という広く文学に及ぶテーマであり、人間についての考察となるものである。これは日本文化研究にとっても比較文化的に役立つものであると考える。

1. 調査の位置づけ

報告者はこれまでに、エレーヌ・シクスーの戯曲『ドラの肖像』における「自己-他者」関係の考察として『人間文化論叢』第9巻に「失われた母との出会い——エレーヌ・シクスー『ドラの肖像』における「母-子」の融合関係をめぐって——」を発表している。ここで論じたのは、精神分析家ジグムント・フロイトのヒステリー症例研究（「ドラ症例」）と、シクスーがその症例研究を批判的に書き換えた戯曲『ドラの肖像』とを比較することで、フロイトが見落としていた女患者ドラとその母親との関係を、シクスーが作品中の登場人物、K夫人との関係から拾いあげ、そこから「母-子」をモデルとした独自の「自己-他者」関係のあり方を提示している、ということであった。それは、フロイトの言う「父を愛する娘」の母親憎悪や異性愛的な「リビドーの代理」としての「同性愛的」恋慕という関係とは別の、女同士の親密な関係として表現されている「自己-他者」のあり方である。その関係性とは支配により所有しあう関係ではなく、「他

者」を排除する関係でもない、母親と胎児の関係に似た「他者」を自己の内にとどめておきながらも共にある関係、シクスーの言う「女にもうひとりの女を与える」（« Le Rire de la Méduse »）関係である。

精神分析の症例研究がすでに存在し、そこからインスピレーションを得た戯曲である点、作品が「ふたりの女」をモチーフとしているという点ではジャン・ジュネの『女中たち』にも同じことがあてはまる。シクスーはジュネのことを「女性性を書くことのできる数少ないフランスの現代作家のひとり」（« Le Rire de la Méduse »）と評しているが、『ドラの肖像』の分析に見られたシクスー作品における「自己-他者」の二者関係の問題をさらに発展させるためには『女中たち』の分析は不可欠であると判断し、次回論文のテーマとした。

『女中たち』は1947年初演のジャン・ジュネの初期戯曲作品である。ふたりの女中の姉妹が、自分たちが従事している家の主を窃盗の罪で密告し、その一方で女主人である「奥さま」を毒殺しようともくろむ。密告はうまく行き、ふたりは「奥さま」が帰宅するのを待ちながら「奥さまと女中ごっこ」をしているが、そこでは互いになじりあったり、「奥さま」への愛情と憎しみの両価的な感情を吐露させたりしながらある種の言葉のサド=マゾ劇を繰り広げている。やがて本物の「奥さま」が帰宅し、主が釈放されたことを知ると、女中たちから毒薬入りの菩提樹茶を勧められるも、おかまいなしに主の待つカフェへと飛び出して行ってしまふ。両人が会えばこれら自分たちが仕組んだ計画すべてがばれてしまふ。そうわかったとき姉ソランジュが逃げ出そうと誘うが、妹クレールはこれに応じなかった。いよいよ追いつめられて今度はクレールが「奥さまと女中ごっこ」の続きで「奥さま」を演じ始め、自分に毒入り菩提樹茶を手渡すよう「クレール

ル」であるソランジュに命じる。ソランジュはとまどうが妹に強く促されて「女中クレール」を演じ、クレールの「奥さま」に菩提樹茶を手渡す。クレールがそれを飲み干すところで幕が下りる。

ジャン＝ポール・サルトルは『聖ジュネー演技者と殉教者』の「補遺3」に『女中たち』論を展開している。サルトルはこの作品を、存在と仮象の間にある「回転装置」とであると述べている。それは嘘の世界が何層にも折り重なりつつ、あるきっかけによりその世界を行ったり来たりするというこの作品の構成を的確に評したものである。

しかしその「仮象」の概念によって、演じる役者のセクシュアリティについてまで説明しきろうとするのには無理がある。サルトルはジュネが同性愛者であったことを根拠に、ジュネにとっては「女も、女の心理も彼の興味をそそりはしない」と言い、『死刑囚監視』の作中人物との類似点から、『女中たち』をその「女」版として、この作品を演ずる俳優は女装した同性愛者の男優でなければならないと考えている。嘘の世界を描いているからには女役を演ずる俳優も嘘、つまり「女」と対称であるはずの「男」でなければならないと強く確信しているようである。「女は、にせの女であるために、ある詩的密度を獲得する」とは、この作品が仮象による作品であり、そうであるからこそ、その作品としての強度を「回転装置」と名づけたのだが、この作品を演じ手も含めたアイデンティティの問題として考えると、このような単純な図式でとらえるべきではない。

レオ・ベルサーニは『ホモズ』の中で、『女中たち』におけるアイデンティティの問題について、ソランジュとクレールが、自分たちが「女中」であることを確認するような内面の場所は存在しないと述べている。『女中たち』では女中という社会的役割が内面の本質であり、その役割の関係の中でしか主体性を確認できる場所はないと言っている。つまりこの作品の中では、ソランジュとクレールの女中同士の関係、あるいは奥さまと女中の間の関係の中でしか自分を認める場は存在しないということになる。これは詰まるところ、次のように言うことができるだろう。ソランジュが「クレール」を演じ、クレールが「奥さま」を演じている劇中劇の中では、「奥さま」は殺害されるが「クレール」は生き残る。現実には死ぬのはクレールなのだが、クレールは「奥さま」の役として自己の外側へ移動することにより、「クレール」を演じるソランジュの中で生き延びることができるのである。サルトルの「回転装置」という翻る瞬間の比喩を使うなら

ば、クレールを演じる役者はそのジェンダーやセクシュアリティにかかわらず、クレールを生き、「奥さま」を生きるクレールを生きるという三重の構造のなかに置かれているということになる。ここまではソランジュを演じる役者も同じなのだが、クレールを演じる役者はさらに、「クレール」を演じるソランジュの中に生き延びることにもなる。ここには単に、にせの「女」か、本物の「女」という、性を固定した本質の問題に還元している議論だけでは見えてこないアイデンティティの問題が出現する。そしてその問題の鍵となるのがソランジュとクレールの関係である、というのが報告者の考えである。

よく知られているように、この『女中たち』という作品にはモデルがある。1933年2月、フランス・サルト県のル・マンで起きた、クリスティーヌとレアのババン姉妹による女主人とその娘の殺害である。地方の資産家の家で女中奉公をしていた姉妹は冷遇に耐えながらも日々沈黙を守り仕事に専念していたが、ある日自分たちの誤りで停電を起こしてしまう。帰ってきた女主人たちに不始末をなじられるや、姉妹は二人にいきなり襲いかかり、生きたままこの母娘の眼球をえぐりとりて二人を殴り倒し、近くにあった錫の壺、ハンマー、包丁などで顔を潰し、さらに一人の腿と尻を切りつけ、その血をもう一人の体に塗りつけるという行動に及んだのである。ことが済むと犯行に使った道具を洗い、自分たちの汚れも落とし、姉妹は同じベッドで横たわりながら警察が来るまでそのままじっとしていたという。その犯行の凄惨さから、近親姦の同性愛者の狂気として猟奇的な関心の的とされることも多く、『女中たち』のみならず、いくつか小説や映画の題材ともなっている。

この事件について精神分析家のジャック・ラカンは「パラノイア性犯罪の動機：ババン姉妹の犯罪」という研究論文を発表している。ラカンはその一年前に『人格との関係からみたパラノイア性精神病』という博士論文を提出しているが、そこで観察された女患者のケース（自分の憎悪の対象であると同時に自分の理想像でもあった女スターの襲撃事件）を重ねて、ババン姉妹の犯行は、「女主人たちのイメージに自分たちの災厄の幻影を混ぜ合わせ」て、その二人のカップルを「残酷なカドリーユ」へと引きずりこんだものであると説明している。ラカンによればこの犯行は主人たちの冷遇に対する単なる復讐ではなく、パラノイア性の自己処罰の衝動と見られるものである。それは死刑判決を受けるやクリスティーヌが跪いた姿からも読みとれる。この自己処罰の衝動は姉妹間の殺傷行為と

してあらわれることもありえたのだが、「真の双生児的魂」であった二人には互いを傷つけ合うのに必要な距離をとることさえできなかった。それゆえ自己への憎悪は第三者へと向けられ、その攻撃的エネルギーのいっさいが犠牲者に向けられて発動されたと考えられるのである。この精神病を分析家は巧みに「二人であることの病い」と呼ぶ。

2. 調査の目的

サルトル、ベルサーニの読解を踏まえた『女中たち』におけるアイデンティティの問題に、拙論における「自己－他者」関係の分析を踏まえた考察が次なる論文の構想である。そのためには、ひとつにはこの作品のモデルとなったパパン姉妹事件について、当時の報道のされ方も含めた詳細な資料の収集により事件の様相を把握しておくことが必要であり、一方では『女中たち』の上演の歴史を振りかえり、どのような解釈のもと演出されてきたのかを振りかえっておく必要がある。しかし国内において報告者の趣旨にかなった研究はほとんどなく、その資料の多くはフランス国内においてのみ入手可能なものばかりであった。特に当時の新聞記事については年代も古く地方紙であることからフランス国立図書館でのマイクロフィルムの閲覧が必要であった。

一方でエレヌ・シクスーの作品、批評については、比較的年代が新しいこともあり、日本における当該研究の数自体が極端に少ないことから論文集や雑誌等まとまった資料は存在せず、日本国内の図書館に所蔵されていない資料も多く、国内での資料収集には非常に困難を抱えているところであった。報告者が発表した論文で扱った作品も含むシクスーの'70年代の初期作品から、'80年代以降の「太陽劇団(Théâtre du Soleil)」による上演作品までのフランス語による研究論文、雑誌等に掲載された劇評についての資料収集はかねてより切望されていたことであった。

3. 調査の実際

本調査研究では、報告者はパリにあるフランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)とサント・ジュヌヴィエーヴ図書館(Bibliothèque Ste.Geneviève)において資料閲覧、複写の作業を行った。調査期間は約2週間であったが、各図書館の閉館日等を合わせると、実質的に資料の閲覧や複写にかけることのできた期間は9日ほどであった。

フランス国立図書館は日本の国立国会図書館に相当する研究機関で、書籍、定期刊行物、手稿、版画等、

膨大な蔵書数を誇る国内随一の巨大図書館である。フランス国立図書館と一口にいても、実際には「リシュリュー館(sites Richelieu-Louvois)」「ミッテラン館(site François-Mitterrand)」「アーセナル館(Bibliothèque de l'Arsenal)」など5種類の図書館とその他、保存・修復館に分けられるが、特に近年新設された「ミッテラン館」は、「リシュリュー館」に所蔵しきれなくなった資料が移動されたため蔵書数も他館を圧倒している。報告者はこの「ミッテラン館」において資料の閲覧、収集を行った。

「ミッテラン館」には専門分野ごとにAからZに区切られた閲覧室があり、そのうち特殊資料が保存されている地階層(Rez-de-jardin)は研究用図書館として、入館を許可されるために図書館員による入館審査を受けなければならない。身分証明書、住居証明書と研究目的を証明する書類(学生証明書、調査予定の文献一覧など)を持参し、一階層(Haut-de-jardin)の入館審査(Service d'orientation)の窓口で面接を受ける。審査の結果、報告者には15日券カードが発行された。

地階層の閲覧室を利用するには、あらかじめ当日の座席を予約しておく必要がある。国立図書館のインターネットサイトから、発行されたカードにより本人認証を行い、座席予約画面から利用時間と希望の閲覧室を選択する。報告者の場合は主に「Vフランス文学閲覧室」に座席予約をした。また、調査途中の資料を翌日にも引き続き閲覧希望する場合は、座席指定と同じく予約ができる。次に来館した際カウンターにカードを持って申し出ると、待つことなく貸し出しされる。

フランス国立図書館においてまず閲覧・収集したのは、パパン姉妹事件を取材した週刊誌*Détective*とサルトル県発行の地方紙*La Sarthe*のマイクロフィルムであった。マイクロフィルムの複写にあたっては担当係に依頼したが、フィルムの性質上、画質には限界があるため複数回複写を依頼することも多かった。カメラ撮影は禁止されているためデジタルカメラによる映像データの保存はできない。そのため、印刷に耐えない箇所については部分的にパソコンによる文字入力を行うことで補った。

雑誌論文については、『女中たち』上演に関しての劇評、とくに演劇批評誌*Obliques*のジュネ特集、*Les voies de la création théâtrale*の『女中たち』特集、*Alternatives théâtrales*の『女中たち』初演時女優らのインタビュー記事について収集することができた。パパン姉妹の研究については、精神科医らによる月刊雑誌*information psychiatrique*の「パパン姉妹特集」号の

特集を複写することができた。いずれも日本国内においては入手不可、もしくは入手困難な雑誌記事論文であり、今回収集できたことは大変貴重であった。

エレーヌ・シクスの戯曲作品に関する研究論文については、日本では入手できなかった *Qui Parle* のシクス特集号、*Sub-stance*、*Thalia* からの論文を入手することができた。シクス作品の劇評・特集については、*Le Monde* 紙に掲載された記事は日本において収集していたが、今回は *Le Nouvel Observateur*、*L'Express* といった週刊誌、*Le Matin* 紙、*Liberation* 紙に掲載されている関連記事の収集を達成できた。

もうひとつの調査先であるサント・ジュヌヴィエーヴ図書館も蔵書数の多い歴史ある大図書館である。ここでは身分証明書とカード用の証明写真を持って受付に行けば簡単に入館登録できる。手続きが簡単であるため、今回のような短期滞在時にも効率よく調査を進めるために利用価値の高い図書館であるといえる。この図書館でも毎回座席を指定するチケットを発行しておく必要がある。建物内にある専用のタッチパネル式画面から座席指定画面へと進み、図書館カードを専用機械に通してその日当日分の座席番号が記されたチケットを受け取り予約する。

閲覧室奥のレファレンスルームではインターネットを利用することができ、*sudoc* をはじめ分野や文献ごとに検索できるリソース集にあたることができる。特に今回日本国内では不可能でサント・ジュヌヴィエーヴ図書館でのみ行えた調査は、フランス国内における博士論文のオリジナルとその複写であるマイクロフィッシュの所蔵先図書館をつきとめたことである。それまでオリジナルの所蔵大学図書館は判明しても、その複写であるマイクロフィッシュがバリ近郊のどの図書館にあるのかまではつきとめることが難しかった。しかしこの図書館が所蔵している「DOCTHESSES」というCD-ROMから1972年以降の博士論文を検索することができるため、閲覧を希望していた博士論文のマイクロフィッシュの所蔵先をつきとめることができた。

この図書館はセルフコピーができるので、書庫より貸し出された図書や雑誌の必要箇所を効率よく複写することができた。セルフコピーの利点は依頼複写よりも単価が安く、見開き2ページを一度に複写できることである。またこの図書館は、平日夜10時まで開いているため、国立図書館の閉館後、移動しておよそ1時間は資料収集にあたることができた。

この図書館で入手できたものに、Francis Dupréの研

究書 *la « solution » du passage à l'acte* (『行為への移行という「解決」』) の複写がある。当初ここまで詳細に取材し分析した研究書であるとは確認していなかったが、この研究書のおかげでバパン姉妹事件の概略がつかめるようになっていたことがわかった。このような発見も実際に海外へ調査研究に出かけてみなければわからなかったことであり、今回の調査研究の大きな収穫となっている。

シクスの文献に関しては、シクスも含めた、主にフランスの女性作家についての研究書 *Genre-Sexe-Roman de Scudéry à Cixous* (Brigitte Heymann, Lieselotte Steinbrugge 編) について複写を入手することができた。

4. 調査の成果

まず国立図書館においては、バパン姉妹事件を報道した地方紙 *La Sarthe* や週刊誌 *Détective* などの一次資料にあたることができた点があげられる。*Détective* の1933年2月9日号では、クリスティーヌ・レアのバパン姉妹が表紙を飾っている。そこで用いられている写真は犯行より何年も前の記念写真の体裁なのだが、どちらがどちらなのかわからないほど二人はよく似ている。実際にはクリスティーヌとレアは8歳年が離れているにもかかわらず、ほとんど双子のように見える。『女中たち』では、判事が夜遅くまで働いていることを知っているクレールに女主人が理由をたずねると、「知っております。*Détective* を読んでおりますもの」とクレールが答えるシーンがある。また、この女主人はソランジュとクレールをたびたび混同するのだが、これもクリスティーヌとレアが見た目にそっくりであったことをジュネは知っていたことを意味している。つまりジュネはこの雑誌にバパン姉妹事件が掲載されていることを知っており、実際に目にしていたということである。このような確認ができたのも、実物の雑誌を閲覧する機会に恵まれてのことである。

サント・ジュヌヴィエーヴ図書館では、バパン姉妹事件を詳細に取材した研究書 *la « solution » du passage à l'acte* の複写を入手することができた。この研究書は、地方紙 *La Sarthe* からの記事を中心とした報道記事、犯行現場の写真、バパン姉妹をめぐる家系図、クリスティーヌ・レア姉妹の手紙等、豊富な資料をもとにこの事件の分析を試みているものである。犯行の詳細についても本人らの供述から丁寧にまとめている。たとえば犠牲者との最初のやりとりでは、女主人から不始末を咎められ、腕をつかまれたクリスティーヌがその手を振りほどこうとしたところ、娘が間に入って

きたのでクリスティーヌは壺で女主人を殴り倒し、娘と揉みあいになった。それを聞きつけてやって来た妹のレアに、クリスティーヌは女主人の眼球をえぐり取るようはっきり指示した、といういきさつであったことが示されている。またこの研究書は姉妹の生い立ちについても家系図の中での位置づけをもとに詳しく調査しており、長姉や母親の存在にも着目しているところに特徴がある。この長姉や母親と、クリスティーヌ・レアの姉妹との関係についても今後考察してみたい。

5. 今後の展望

クリスティーヌ・バパンは「別の人生では、私は妹の夫でした」と言っている。このような狂おしいまでの親密な関係を既存の夫婦関係の比喻でしか語れないことにこの人物の不幸がある。『女中たち』のクライマックス、「奥さま」を演じるクレールは、毒入り菩提樹茶を飲む前に2回ソランジュに頼む。

「ソランジュ、あなたの中にわたしをしまっておいてね」

「あなたが判決を受けるとき、あなたの中にわたしを抱えていることを忘れないでね」

クリスティーヌ・バパンは「妹を返して！」と叫び獄中でひとり死んだが、ジュネの『女中たち』では姉ソランジュは妹を失ってもなお共に生き続けている。

バパン姉妹の特異な関係性、「二人であることの病い」がジュネの『女中たち』では絶望的な経験を経てなお「二人であることの希望」へとつながっている。今回の調査研究によって得られた資料をさらなる作品の分析に活用し、その成果をまとめ、『人間文化論叢』に独立した論文として投稿する予定である。

参考文献

- Hélène Cixous, «Le Rire de la Méduse» *L'Arc*, n° 61, 1975
 Julia Dobson, *Hélène Cixous and the Theatre*, Peter Lang, 2002
 Jean Genet, *Téâtre complet*, Gallimard, 2002
 Jean-Paul Sartre, *Jean Genet-comédien et martyr*, Gallimard, 1952
 Leo Bersani, *Homos*, Harvard University Press, 1996
 Jacques Lacan, «Motif du crime paranoïaque», *De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité suivi de Premiers écrits sur la paranoïa*, Editions du Seuil, 1975
 Yves Chevallier, *En voilà du propre! — Jean Genet et Les Bonnes*, L'Harmattan, 1998
 鶴飼 哲, 「特別講演 さまざまな『女中たち』——ジュネ演劇再考」『仏文研究』no.31, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 2000
 関 忠盛, 「ラカンのパラノイア論 人格との関連のもとにみた自罰パラノイア」『現代思想 7月臨時増刊号 総特集＝ラカン』vol. 9-8, 青土社, 1981

つだ くみこ／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

上記の研究は、エレヌ・シクスー研究に必要な資料を、フランス国立図書館において収集することを主眼とするものでしたが、調査研究期間、非常に能率的にコピーその他をすることが出来たと聞いております。まさに、与えられた海外調査研究の機会にのみ可能なことであったわけで、今後の研究に活用できるものと、指導教員として非常に喜んでおります。

(人間文化創成科学研究科 教授 中村 弓子)